

竊かに愚案を回らして、ほぼ古今を勘うるに、先師の口伝の真信に異なることを歎き、後学相続の疑惑あることを思うに、幸いに有縁の知識によらずは、いかでか易行の一門に入ることを得んや。全く自見の覚悟をもって、他力の宗旨を乱ること莫れ。よって、故親鸞聖人御物語の趣、耳の底に留まるところ、いささかこれをしるす。ひとえに同心行者の不審を散ぜんがためなりと云々  
(歎異抄前序・原漢文)

第17組 幸福寺住職

楠 信生

text by Shinshou Kusunoki

## 前序 「他力の宗旨」

### 後学相続の疑惑

唯円は、自らの師である親鸞聖人から直接お聞きした真実信心とは異なったことが聖人亡き後、語られているのを聞くにつけ、これからの人が真実の信心を相続していくときに当然起こる疑惑を思うのでした。そして、「よきひと(有縁の知識)」との出会いなくして、念仏の一道(易行の一門)に入ることはできないと語るのです。

このようなことは、親鸞聖人の文の中にも見ることができます。

浄土宗の義、みなかわりておわしましおうてそうろうひとびとも、ただ聖人の御弟子にてそうらえども、ようように、義をもいいかえなんどして、身もまどい、ひとをもまどわしおうてそうろうめり。  
(『御消息集』聖典五六五頁)

訳：浄土宗の意味を、みな異なって了解しているひとびとも、法然上人のお弟子なのですが、さまざまに教えを言い換えたりして、自分だけでなく、人々をも惑わしているのです。

さらに曇鸞大師の『浄土論註』にも、つぎのような言葉があります。

愚かなる哉後の学者、他力の乗すべきことを聞いて当に信心を生ずべし。自ら局分すること勿れ  
(『真宗聖教全書一』三四八頁)

愚かではあるが、浄土の法を学ばんと後につづく者たちよ、他力に身をまかせるべきむねをよく聞いて、信心をおこすべきである。けっして自分だけの小さなおもいにひっこんでひとりよがりにならないように。(東本願寺発行『解説浄土論註』訳)

親鸞聖人の『御消息』の言葉、そして曇鸞大師の『論註』の言葉も、如何に他力の教えが分かりにくかったり誤解されやすかったりするかを語っているわけであります。このことは、他力の教えに問題があるからなののでしょうか。もちろんそうではありません。親鸞聖人が「まどい」「まどわし」と言い、曇鸞大師が「愚かなる哉」と言っているということは、私たちの日常の考え方自体に問題があるということを見ておられるということであります。

### 自見の覚悟と他力の宗旨

「自見の覚悟」とは、ひとりよがりな勝手な解釈のことですが、それがほかでもない念仏の教えを聞いている人々の中に起こっているということが問題なのです。念仏の教えを聞

かない人の批判や誤解によって、念仏の教えが混乱することはありません。念仏の教えを聞いている、信じていると思っている人の惑いが混乱を招くのであります。まさに獅子身中の虫ということでもあります。そして歎異の精神とは、その獅子身中の虫を単に他者にのみ見るのではなく、矛先（ほこさき）が自身に向かう、自身への問いかけとなることにあります。

『正信偈大意』に、

往還回向由他力 正定之因唯信心というは、往相還相の二種の回向は、凡夫としてはさらにおこさざるものなり、ことごとく如来の他力よりおこさしめられたり。正定の因は信心をおこさしむるによれるものなりといえり（聖典七五五頁）とあります。自らおこすのは自力の信、「ことごとく如来の他力よりおこさしめられたり」ということを「故親鸞聖人御物語」の言葉の意味を確かめ続けられることをもって他力を生きたのが『歎異抄』の著者、唯円であったのです。